



徳成寺 寺じかから版 第190号 2022年10月



いつもありがとうございます。住職の大山です。

最近、当寺の入り口に久しぶりに法語が貼り出されました。

結構パンチの効いた法語です。しかしこの法語は、坊守が痛く

感激して貼り出したものです。また先月来て頂いた海 法龍先生も

彼女がぜひにと望んでお招きしました。とやかく私が指示して実現した

のではないのです。当寺に嫁いで30年以上が経ちますが、当初こんな事が

起こるとは夢にも思いませんでした。道を求める人のことを「^{せんこうにん}染香人」と呼ば

れます。長年、仏法のそばに居ると強制したわけでもないのに、道を求めずには

いられない心が、自然に呼び覚まされるようです。まるで春になったら、草花が一斉に

芽吹くかのように。不思議と言えば不思議。苦しんだり悩んだりしている人間の

底に、「何のために生まれて、生きているのか」尋ね求めずにはいられない心が

どんな人にも眠っているのだと証明している気がします。どうぞ法語をご覧ください。

-発行責任者-
住職
大山健児
坊守
大山ひとみ



大山超世の耳を澄ませば



お世話になっています、副住職です。お彼岸でお世話になりましたご門徒の皆様ありがとうございました。大谷派の出張所で四国会館と言う場所があります。そこでは毎月下旬に真宗講座という講座が開催されており、私は初めての法話の機会を賜りました。親鸞聖人に聞くと言うテーマの下、聞くと言う行為は促しに対してどう応えていくかを示す事だという話をしました。時間は30分。始まるまでは非常に長いと感じておりましたが、話終わると、もう少し時間が欲しかったなあと感じる次第でした。ご法事、お通夜等で度々話をする機会はありませんでしたが、また違った雰囲気でも難しかったです。もっと、精進しなければという思いと、最後まで聞いて下さった門徒さんへの感謝で胸がいっぱいになりました。ありがとうございました。